自然の恵みを
生かすとき

COP10から
つながる未来

ナショナル ジオグラフィック日本版　2011年10月30日発行（1995年7月3日第3種郵便物認可）号外

ナショナル ジオグラフィック 日本版 特別編集版

NATIONAL GEOGRAPHIC SPECIAL

再生と生物多様性

自然の力を回復するとき

再生へ、歩み始める東北

暮らしに広がるCOP10の新しい波

国連生物多様性の10年 私たちがすべきこと

愛知目標を達成する年
2020年

愛知・名古屋で開催されたCOP10から1年が経った(日本は2012年のCOP11まで議長国)。その成果である「愛知目標」は、正確には「生物多様性条約戦略計画2011-2020」といい、2020年までに達成すべき20の目標が定められている。愛知目標を分かりやすく言えば、2020年までに「生物多様性」という言葉について誰もが理解できる社会にすることだ。

「単純に自然を原生のまま守ろうということなら、国でもできます。しかし、生物多様性の問題は、“いのちのつながり”であり、私たちの暮らしと結びつくもの。社会全体の関わりが不可欠です」と環境省の渡辺綱男・自然環境局長は語る。

今年から始まった「国連生物多様性の10年」。あまり知られていないが、日本のNGOの発案を受けて政府が国連に提案し決議された。つまり、市民発、日本発で誕生したもの。それだけに、私たちは、生物多様性の保全や、自然の恵みの持続可能な利用を考えて行動したいところだ。

ただ、地球温暖化対策であれば、CO_2を何%減らすという分かりやすい目標を設定できる。ところが、生物多様性が包含する範囲はあまりに広く、地域ごとに事情も異なるため、明確な基準の設定は困難なのが現実だ。

「文化と生物多様性の問題をつなげて考えることは、きっかけになると思います。例えば、地域のお祭り、名産の食べ物などです。これらも生物多様性の恵みそのものです」(渡辺局長)。つまり生物多様性は遠い地域の環境問題ではなく、日々の衣食住と密接に関わり、文化や芸術、レジャーなどとも深くつながっている。“知る”きっかけづくりとして、生物多様性についての理解や普及の動きもNGOのイベントなどを中心に活発化している。生活者であり消費者である私たち一人ひとりが身近なところに目を向けることが、COP10が描いた未来像を実現するための第一歩になりそうだ。

写真:NPO法人 MERRY PROJECT

「生物多様性が豊かなほど、地球は子どもたちの笑顔であふれる」。NPO法人の「MERRY PROJECT」は2010年10月、COP10会場の正面で子どもたちの笑顔の傘を一面に広げた。